

LSE的文化とイギリスの活況

法学部助教授 中山 竜 一

90年代イギリスの活況

かつてない英国ブームだそうである。ファッション誌は競ってイギリス特集を組むし、林望教授やマークス寿子さんらのエッセイもあいかわらず売れ続けている。ガーデンングや西洋骨董のブームにしても、英国流の伝統的なライフスタイルへの憧れと切り離すことができないし、この話をするに当るイギリス人たちはみな笑って驚くのだが、一時は見向きもされなかったイギリス車を買おうという奇特な人たちも増えているようだ。しかし、その舞台裏には、昨今の円安にもめげず大金を落とし続ける日本人観光客の更なる誘致と、日本におけるイギリス製品の売り込みにさらに力を注ごうとするイギリス政府の大規模なキャンペーンがあるということも、われわれは知っている。いかなるブームの背後にもその仕掛人がいるということこそ、80年代にわれわれが学んだことであった。

しかし、近頃のイギリスがこれまでにない活況を呈しているということも、やはり否定できない事実である。しかも、不況をなかなか抜け出せずにいる日本とは正反対に、ますます上昇を続ける消費、株価、通貨、地価を指標としたイギリス経済だけでなく、ファッション、サブカルチャー、音楽などについて見ても、いまのイギリスは確かに勢いづいている。かつて60年代、イギリスでは、ビートルズやローリング・ストーンズらをはじめとする若者の生き方そのものとしてのロック・ミュージックの浸透、ミニスカートの流行に典型的に見られるようなファッションの革新、現在のロ

ンドン・ブームの仕掛人でもあるコンラン卿が最初に仕掛けた「Habitat」——日本の80年代の「無印良品」にあたるものと考えていただければいいかと思う——による都市のライフスタイルの変化などなど、社会や文化が大きく変化した。そして、これを指して、「Swinging Sixties」——むりやり訳せば「揺れに揺れる60年代」といったところか——という表現もつくられた。しかし、90年代も終わりにさしかかった現在、イギリス人たちは、社会が再び「揺れ」はじめたと感じている。他の西欧諸国同様、様々な社会問題をいまだ抱えているとはいえず、「London Is Swinging Again!」といったキャッチ・フレーズがそれほど違和感もなく受け入れられている現在のイギリスは、「英国病」がもはや末期症状にあった70年代、サッチャー政権の荒療治の反動でますます停滞しているかのように見えた80代とくらべて、確かに、「どこか違うぞ」と思わせるのである。

以上は、わたしが'96年10月から'97年9月までの一年間を、ブリティッシュ・カウンシルのフェローとしてロンドンで暮らすうちにいただいた実感である。一度はどん底まで落ちているにもかかわらず、抜本的な、しかしそれだけに大きな痛みもともなわずにはない改革を断行することによって、再び歴史のプレーヤーの地位に返り咲いたこうしたイギリスの底力は、わたしが法律学専攻の大学院生として在籍したロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（正確には、London School of Economics and Political Science、略称LSE。また、LSE

の卒業生は好んで母校を「The School」と呼ぶ。まるでここをおいて他に「学校」は存在しないかのように)でも、ひしひしと感じられた。そこで、この短文では、わたしが第二の学生生活を経験することとなったLSEという場所を紹介することによって、現在のイギリスの活況の裏に、オックスフォード=ケンブリッジ流の貴族主義的で閉じられた文化とは異なる、現実的で風通しのよい、開かれた文化があるということを示したいと思う。

LSEというところ

LSEは、いまではロンドン大学の一カレッジとなっているが、そもそもは『ピグマリオン』(オードリー・ヘップバーン主演の映画『マイ・フェア・レディー』の原作)などで有名な劇作家バーナード・ショーと、産業化と都市化によって生じた様々な社会問題の解消に心血を注いだ、ファビアン協会のウェッブ夫妻らによって設立された私塾であった。19世紀末のある夏の日の歓談で出された「ものごとの原因の究明を実際の社会問題の解決に役立てることのできるような、そうした人材を育成する学校があればねえ」という思いつきが、まずはバーナード・ショーの自宅の一角を借りて、さまざまな講師を呼んで行われる私塾というかたちで実現し、それはやがてLSEへと発展していったのである(ショーの書斎は現在、LSE本館に移され、Shaw's Libraryという名の図書館として学生や教員たちの憩いの場となっている。また、ここでは学内向け無料コンサートもほぼ毎週行われている)。やがてショーの家は手狭となり、LSEは王立裁判所のすぐそばのクレア・マーケット通りに移ることになった(この住所は現在もかわっていない)。また、制度的には後に、ユニヴァーシティ・カレッジ(余談だが、この入り口付近には、「最大多数の最大幸福」で有名な功利主義の哲学者であり、ロンドン大学の創設者でも



LSE本館(Old Building)付近

あったジェレミー・ベンサムの「オートアイコン」——ミイラ的一种と考えるてもらえばいいだろう——が安置されている)やキングス・カレッジとならぶ一カレッジとして、ロンドン大学に編入されることとなった。

その後、LSEは文字どおり、イギリスの政治・経済・社会変革のモーターとなる。財界、官界、政界、学界に社会科学の素養をもった、「使える」人材を供給し続けたのみならず、イギリスの大きな政治・経済上の構造改革の背後には、必ずLSEがあったと言っている。

まず、戦後、各国の福祉国家のモデルとなったイギリス型福祉国家——「ゆりかごから墓場まで」のあれである——の設計者、ベヴァリッジは、第一次世界大戦後から第二次世界大戦にかけてLSEの学長であった。また、その次の巨大改革であるサッチャー政権の大胆な市場化と規制緩和の背景にはハイエクの経済学と社会哲学があったが、ハイエクもまたLSEで長らく教鞭を取っている。そして、現在最も注目されている社会学者の一人であり、LSEの現学長であるアンソニー・ギデンスは、保守党の長期政権をついに終わらせることに成功

したトニー・ブレアの隠れたブレインの一人である(ちなみに、ギデンスは学長として多忙を極めるにもかかわらず——サッチャー政権による大幅な教育予算削減以降、イギリスの大学学長の主要な仕事は寄付金集めである——週に一度、社会科学全般への導入として、マルクスやウェーバーから近年のグローバリゼーション論にいたる「近代化」理論をめぐる講義を行っている。名目上は一年生向けの入門講義ということになっているが、簡単に真似のできないような、明晰で生き生きとした名講義で、教員や学外からの聴講者も数多く盗み聞きしていた)。

制度改革に対する直接的な影響だけでなく、学問的にも、LSEは数多くのパイオニアたちを生んでいる。一例を挙げれば、経済学では、先ほどあげたベヴァリッジ、ハイエクや、ライオネル・ロビンス、政治学者ではラスキ、オークショット、人類学のマリノウスキー、科学哲学では、ハイエクの盟友でもあったカール・ポパー、その弟子のラカトシュ、方法論的アナキストとして有名なファイヤアーベント、社会学のダーレンドルフ、アーネスト・ゲルナーなど、そうそうたる面々がLSEで教鞭を取っている。また、われわれ日本人には、『イギリスと日本』などの骨太のエッセイや最近刊行が始まった自伝などで有名な経済学の森嶋通夫教授の名前がまず思い浮かぶ。

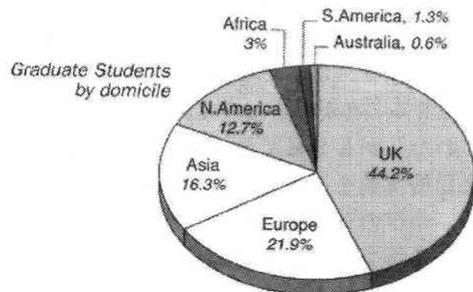
LSEの底力としての留学生

こうして綺羅星のようにならんだ数々の名前を眺めていると、そこに共通した一つの特徴があることに思い当たる。こうしたLSEの歴史を飾るビッグ・ネームの多くが、必ずしもイギリス人——あるいは、もっと広く英連邦(コモンウェルス)出身者——ではなく、外国人であるということだ。

いまでもLSEには、留学生が多い。この学生の半数以上は世界中から集まった留学生たちであり、また、その比率は年々

増えつつある。おそらく、その理由の一つには、英語というものが、ビジネスにおいても、政治においても、学会においても、ますます共通のワーキング・ランゲージとなりつつあることがあるのだろう。好むと好まざるとにかかわらず、それはもはや現代のラテン語といってもいい。また、イギリスの近年の経済的活況が留学生を呼び込んでいるのだと考えたい向きもあるだろう。あるいは、サッチャーによる大改革以降の、イギリスの大学の厳しい台所事情をよくご存知のかたのあいだには、留学生の方がイギリス人や英連邦出身者よりも高い授業料を払わなければならないシステムなので、大学は財政的配慮からなるだけ多くの留学生を取りたがるという説明をするむきもあるだろう。

しかし、これらは半面真実であるが、後の半面は当たっていない。まず、英語の勉強ならわざわざここでなくてもいいだろう。また、経済的凋落が即座に留学生の数の激減と結びついてしまうどこかの国の場合と違って、不況期もLSEは多くの留学生でごった返していた。最後に、大学財政にとっては旨みの少ない「割引料金」は実はイギリス人だけでなくEU諸国の留学生にも適用されているが、にもかかわらずLSEの場合、最も多いのはヨーロッパ出身の留学生なのだから、この説明もあまりしっくりとこない(ちなみに、わたしが在籍した法律研究科の場合、EU統合の影響であろうか、



LSE大学院生の出身地
(Student Statistics 1995/96)



BLPES入口付近

ドイツからの留学生が最も多く、東洋人はわたしも含めて数えるほどしかいなかった)。

では、何がそれほどまでに留学生たちをLSEに引きつけるのだろうか。それは、LSE特有の自由な空気である。率直に言って、LSEでの学生生活は掛け値なしに楽しい。というのも、言語も、宗教も、生活習慣もまったく異なる中央ヨーロッパや極東の出身者であっても、ここでは自由に研究に打ち込むことができ、成果は成果として偏見を交えることなく評価されるからである。複数の異なる視点が交差し、異なる意見や立場がぶつかりあう、そうしたことをむしろ積極的に期待する懐の広さが、イギリス人中心のオックスフォードやケンブリッジにはないLSE独自の国際的かつ学際的な学風をかたちづけている。先にあげた様々な分野のパイオニアたちも、このような自由と異文化に寛容な土壌があったからこそ、はじめてその着想を自由に開花させることができたのではなかろうか。

わたしがLSEで学んだことは、異なる文化的背景を持つ留学生が萎縮することなく、のびのび研究に打ち込めるような懐の広い場所でこそ、革新的な着想が育まれるということである。自由で寛容な学問風土が多様な学生を集めるのであって、経済的なメリットはむしろその結果に過ぎない。



学術雑誌コーナー

経済的活況が留学生を集めると考えるのは、転倒した考えかたである。経済が悪くなった途端、留学生がいなくなってしまうような場所には、苦勞してでもそこで学びたいと願うような自由で寛容な学問文化が、そもそも育っていなかったというだけの話なのだ。

紙幅の都合もあり、むりやり結論に持っていくが、現在のイギリスの活況についてもこうした異文化への寛容ということが、その背景の一つとして考えられるのではなかろうか。例えば、ファッション界においてロンドンが再び世界の中心となりつつあるのは海外出身の若いデザイナーたちに負うものであるように、海外からの積極的な人材の登用を通じて異文化に根ざした異なる着想やノウハウを生かすことができたということ、このことこそが90年代イギリスの活況の源であると言えるのではなかろうか。だとすれば、イギリス政府のキャンペーンに踊らされ、あいもかわらず「英国の伝統」とやらにお金を落とし続けるよりも、植民地統治の結果として流入した外国人や移民との日常的なつきあいによって育まれた、多文化社会の上手な作り方や、そこから新しいものを生み出してゆく知恵を学んだほうがいいのではなかろうか。

図書館の広報誌ということで、最後にLSEの図書館についても一言ふれておきたい。LSEのメイン・ライブラリーは、さきほど名前をあげたShaw's Libraryではない。これはむしろサロンのようなもので、椅子なんかも少しくたびれてはいるが立派なソファで、座っていると、ついついたた寝してしまうような場所である。学生や研究者が研究に励む場所は、クレア・ストリートのBritish Library of Political and Economic Science (BLPES) である。ここは、LSEのメイン・ライブラリー——それゆえ、その一角には、学生の研究の便宜のため授業関連書籍を集めたコース・コレクション・コーナーなどがある——であると同時に、あの大英図書館 (British Library) の社会科学部門別館としての役割も担っている。それゆえ、社会科学関連書ではイギリス最大のコレクションを誇り、英語圏、少なくともイギリス国内で出版されたほとんどの社会科学書の閲覧が可能となっている。約400万冊の書籍、資料が所蔵されており、しかも、その多くが開架で手にとって見ることができるのだから、たいしたものである。

この全館開架方式をはじめとして、学生としてこの図書館を使ってみて最も感心した点は、そのあらゆる仕組みがユーザーである学生や教員の便宜を中心に考えられているという点であった。たとえば、返却予定日に借りた本を返さなかった時のペナルティとしては、日本では一定期間の貸出停止となる場合がほとんどであるが、ここでは遅れた日数分の罰金さえ支払えば、また続けて本を借りることができる。これは、報告準備や論文執筆のためにいつでも図書にアクセスできる状態にあらねばならない学生や研究者への配慮からに他ならない。また、図書の検索は、図書館内各フロアに置かれた多数のコンピューター端末で行うことができるが、ここでは検索だけでなく、すでに貸出し中の本の次回予約や貸出し延長手続についても、館員の手を煩わせるこ

となくユーザー側で簡単に行うことができる。しかも、システムは外にも開かれているので、こうした諸々の手続をLSE構内の別の建物の端末や、Telnetを介して自宅のパソコンから行うことも可能である (これは、ロンドン中心部から地下鉄で30分ほどの郊外に住む身にとって、はなはだ便利なシステムであった)。また、WWWがこれだけ普及した現在となつては特筆するほどのことでもないが、BLPESの図書情報システムはロンドン大の他カレッジ図書館のシステムに接続されており、わざわざ遠くまで足を運ばずとも他カレッジの本を簡単に検索、予約できたものなかなか便利であった。より詳しい情報が必要な方は、インターネットで次のアドレスにアクセスされたい。

<http://www.lse.ac.uk/blpes/>

最後に、もう一つ。LSEに学んだ最も有名な人物は、ローリング・ストーンズのボーカリスト、ミック・ジャガーだろう。卒業こそしなかったそうだが、老いてなお盛んなその経済活動(?)をつうじて、彼はLSEで学んだことを身をもって実行し続けているのではなからうか。また、世界経済を影で動かすといわれる男、ジョージ・ソロスもLSEの卒業生である。そして、彼もまた外国人であった。

<参考文献>

Ralf Dahrendorf, *A History of the London School of Economics and Political Science 1895-1995*, Oxford University Press, 1995.

LSE Graduate School Prospectus 1997/98, The London School of Economics and Political Science, 1996.

グラフ・写真は「LSE Graduate School Prospectus 1997/98」による。